

讀史餘錄 綠江先生
白雲野政大臣
嗚呼時事可知耳

(前承) 簡ひ落すやうな牡
丹雪はますく紛々として
降りしきり巴まんじと渦巻
いて殆んど五六尺先きも
つきり見ぬため白い煙の中
に一團の人影が入り亂れて
斬り合つてゐるのでして
時々「正」「堂」といふ掛
聲が聞ゆる十八士が同志打
ちをしない様に兼ねて定め
た合言葉だ。

非伊直弼の乗つてゐる駕籠
かつぎは戦ひが始まると同
時に腰を抜かさんばかりに
して逃げ去ってしまった駕籠
は地面へ据わられたまゝ、
天命降きたと見た直弼はジ
ツとして動かなかつた。

其駕籠を引かけて阿修羅の
如く突進して来たのは稲田
重藏である半谷羽を着たま
ゝ血の滴る太刀を双手に握
りしめて馳せ寄ると見る間
に駕籠を引かけてブスリと
刀を刺貫いた其時右村治左
衛門が飛び込んで来てカゴ
の戸をわしつかみにはがし
取つた直弼の身体は紅に染
つて前へ倒れてゐたその襟
頭をさつて外へ引き出した
有村の劔がふり上げられる
と見ると既に幕末の大傑の
首は落ちた刀を逆手に取り
直した有村は其首をクザッ
と鋒先へ刺し貫いてヨカヨ
カと高聲に叫んだ廣岡子之
次郎がその傍へ走。来たそ
して「占めたくくく」
思はず刀を振り廻して劔舞
をやつた有村はよか々々を

夢中に繰り返しながら今の
日比谷公園の方に向て土手
添に歩き出した廣岡が其わ
きに並んで詩を口早に吟じ
ながら行つた二人とも血ま
みれてゐる。

非伊家の用人小河原芳之助
は重傷をうけて降り積る雪
の中に倒れてゐたが、その
詩吟の聲にふと我にかへつ
たと同時に有村の劔尖に刺
貫かれた主君の首を見た小
河原は行き過ぎた二人の後
をヨロメキながら追つて現
在の府立第一中學校の表門
の前の所で漸く追いついた
有村も廣岡も本懐を達した
時と雖も、夢中である
と、雪の中のこととて足音
もしなかつた下河原は追付
くや否や有村の後頭部に深
く切り込んだ廣岡が忽ちふ
りかへりざまに小河原の肩
から乳にかけて一刀の下に
之を介した。

二人はそれから左に折れて
今の宮城前の大通りを真直
に大手門の方へ向て歩いた
けれども後頭部を真半分
に割られてゐる有村はもう一
歩も歩けなかつた大手門の
近くの辻番所の所まで来て
遂に「廣岡もう駄目だ」と
言つて直弼の首を傍に置き
て腹を一文字に切つて死ん
だ廣岡もそれから二町ほど
先で切腹した櫻田門外の上
を下の驛の中を他の十
六七も或は近侍の大名屋敷
へ自首して刑に就き或は逃
れて遂に明治の世に及んだ
者もある。

直弼は一に國家のために違
勅問題を惹起し安政の大疑
獄を起した一身を擲つての英

磐城セメント 四倉工業所
四倉町電話二二番

江名町信用購買利用組合
理事長 太清左工門

専門内科一般
内科は何でも診療致します
呼吸器病ばかりではありません

平町南町六五
川井内科診療所
電話七二二番
醫學士 川井重之
女醫 川井安子

正確無比の品質と比較的安價の時
計眼鏡等をお求めになる方は
平町一丁目
常盤屋時計店
で御買ひになることが
特に御利益です


今を盛りのお花見の
御遊興には是非共
松ヶ岡公園内の
ときあへ
電話二二六番

江名町中之作鐵工所
吉田昌雄

湯本信用無盡株式會社
湯本町 電話四七番

御客様第一

御依頼者と大和田印刷所の握手



精々低廉に
且つ短時間で
御用達申上げます

大和田印刷所を
御利用
ください

大和田印刷所
平町南町十五番地(電話四六番)

皆様呉服物の御賣出し
には是非御来店下さい
御待ちして居ります

豊間村
大敷網事務所

御料理 越乃家
平町二丁目
電話四三番

御料理 石川亭
平町田町
電話三三番

銘酒 清世界 釀造元 小野晋平
小名濱町 電話六番

三井呉服店
電話一五七三
一八